

評論

奨励賞

【自由作品】

白い服の佳人

北野清三

はじめに

仲井夜潮句集が発行されてことしで四十一年になる。夜潮氏に米寿記念の句集出版をすすめた一人として、大先輩の句業をひもとくことによって、私自身の俳句の栄養にもなるのではないかと非才も省みず筆を取ることとした。

まず、句集から略歴を紹介しよう。

明治二十九年五月二十五日、富山県石動で生まれた。本名は芳雄。能登中居から出た元禄期の前田藩釜師、金屋文左衛門の後裔。

大正三年三月、石川県立金沢二中を卒業。

同年九月金沢医専に入学。大正七年五月卒業。

大正七年富山県東砺波郡で医院を開業。

大正十年東京泉橋三井慈善病院で眼科研修。

同年十月、野田たまきと結婚。

大正十二年九月石川県立金沢病院で眼科研修。

大正十三年から昭和二年まで敦賀病院眼科医長。

昭和二年五月四日、小松市西町で眼科を開業。開業の日に長男信雄が出生。

昭和十七年、医学博士号を取得。

昭和三十年学校医として全国表彰。四十七年には勲五等旭日重光章を授与された。

この間、市や県の医師会役員をつとめたほか、石川県眼科医会会長、日本医師会代議員、日本眼科医会理事等を歴任した。

昭和五十八年五月「仲井夜潮句集」を出版。句歴は昭和の初め二年ほど森本之襲氏に手ほどきを受け、終戦前後を通じて山本素

律氏と、戦後は町原本木佳と親交、芦俳句会入会。木佳亡きあと會長になる。

昭和五十八年、小松俳文学協会が設立され初代会長に就任。小松俳壇の功労者である。

初期作品

蛙に黍加賀の山脈ならかに
門黍の丈不揃ひに夕の風
瀉わたる風ひろくと秋近し
畦豆のからからと鳴る風のあり
鯉跳ねる湖口夕日も水にをどり
獅子舞の子の爪先の力みたる

これら初期作品にみる的確な写生眼とみずみずしい情感は、その後も脈々と続いていくのである。

特に最後の獅子舞の句は「子の爪先の力みたる」の表記は鋭い観察眼から得た新鮮で力感にあふれている。

透徹した詩眼

煙草火がふたつに別れ夜の秋
蠅叩くよろめくものをまた叩く
莫塵すけて土の冷たき花見かな
春風がひよこの生毛へこませる
白鳥の頸が湖より生えている
羊みなうつむいている春の牧
晩秋やプールの底に風うごく

煙草火が「ふたつに別れ」で二人の人が別れてゆく光景を見事に表現している。

二句目の蠅叩くは「よろめくものをまた叩く」と、非情なまでの追求。その徹底ぶりが人間性を捉えている。

三句目の「土の冷たさ」という体感実感である。

四句目の春風がひよこの「生毛へこませる」という徹底した観察眼が捉えたもの。

五句目は「白鳥の頸が生えている」という把握のしかたが面白い。

六句目では「羊みなうつむいている」という写生眼がよい。

七句目の「プールの底に風うごく」という観察眼など、その的確な写生は透徹した凝視の産物である。作者の研ぎすまされた詩眼は、見えぬものまで見抜く鋭さをもって対象に迫っている。

生活俳句の庶民性

押し出せし行火^{あんか}をさぐる暁の冷え
蛙鳴く田の面に尿を走らせる
かき餅の紅白さがる下に住む
靴下を重ねても同じ穴なりき
医師の手の冷たく蒲団くぐり入る

夜潮俳句の親しさは、何といっても、その生活俳句の庶民性にあると思う。

一句目の「行火をさぐる」のは言っていないが足であろう。そのしぐさの人間性がよい。

二句目の田んぼへ「尿を走らせる」豊かな人間くささ。

三句目は吊りさげられたかき餅の下に住むという庶民性。

四句目の「靴下の穴」によせるペースと日常性。

五句目の「医師の手」にみせる人生の哀感など、何のてらいもなく、日常生活の一こまを巧みに捉えた表白が読者の共感と呼んで止まないものである。

ユーモアとおかしみの俳句

廃屋の囲炉裏壁には陛下の像
駐在は痩せ夫人は肥えて夏をはる
熱帯夜質に入れたきわが五体
わが裸天皇に似て猫背なる
朝寒やこちらを向けば女なる
着ぶくれて恍惚はただ笑ふのみ
蛙鳴き鶏鳴き自動販売機

ユーモア俳句もまた夜潮俳句の特徴のひとつである。

一句目の廃屋に見る陛下の像の滑稽。

二句目の駐在さん夫婦の好対照なおかしみ。

三句目の熱帯夜における「わが五体」を質入れしたいという発想のおもしろさ。

四句目は人間天皇に似せる自画像のユーモア。

五句目は「こちらを向けば女」という現代風俗に対する諷刺である。

六句目の「着ぶくれて」の句にみせる高度な諧謔。

七句目は蛙や鶏と同居の自動販売機のおかしみ。街角や道路わきなど自動販売機の進出は物凄い。

現代の世相や風景をすかさず句に仕立てあげる手腕はたいしたもののである。

夜潮氏のみずみずしい感性と詩精神の柔軟さに驚くほかない。

子どもに対する愛の深さ

抱く子のぬくみを膝に秋裕
昏々と吾子の病む灯の夜寒かな
病む子背に雪の峠を医者がりへ
病床に來遊ぶ吾子は衣更へて
若葉光あやせば笑ふ子のふた齒
着ぶくれて子の手は口に届かざる
耳たぶに涙をためて児の昼寝
温み通ふ孫の頭とわが顎と

これら一連の作品は、幼い子供に対する愛情の深さと温かみにあふれている。

とくに、三句目の「病む子背に雪の峠を医者がりへ」は圧巻である。

五句目の「笑ふ子のふた齒」。六句目の「子の手は口に届かざる」。七句目の「耳たぶに涙をためて」など、確かな写生眼に裏打ちされ、細かいところまで愛情が行き届いている。

妻への讃歌

女の子と決めて秋夜を妻縫へる
妻の頸老いぬ夜寒の搔卷に
雪の宵湯気立つものを並べ待つ
病む妻を膝に支へて花火見る

一句目は、今度生まれてくる赤ちゃんは女の子であると決め、産着を縫う妻をやさしく見守っている。

二句目は妻の頸に老いを感じとっている。「搔卷き」は薄く綿を入れた袖つきの夜具で、現在は使われていないのではないか。時代を感じる。

三句目は夕食の準備で、雪の降る宵に湯気の立つ熱いものを作って待っていてくれる妻への感謝の気持ちを詠っている。

四句目は病気で床につく奥さんを膝に支へて花火を見ている様子である。

このように夜潮氏の温かい眼差しは、最愛の奥方へも十分に注がれている。

そして、次のようなロマンの香り高い句に読者は圧倒されるのである。

白き服の佳人は汗を出さぬもの

白き服の佳人はもちろん奥さんである。そして「佳人は汗を出さぬもの」と決めこんでいる。奥さんのことを佳人と言い、汗を出さぬように環境を整えてあるのだ。奥さんへの最高のほめことばである。

耕牛はたのし乙女にあやつられ

これまでに「耕牛はたのし」と詠んだ人はあっただろうか。

私が見るに、普通は耕牛はむち打たれ、よだれを垂らしながら、よたよたと働いており、楽しそうに働く牛など見たことがない。

それなのに、なぜ耕牛はたのしと詠んだのか。それは、乙女にあやつられているからである。対象物を見るに愛情にあふれた夜

潮氏ならではの把握である。

そして、これは、耕牛が夜潮氏であり、乙女は奥さんであると推察されるのである。

最高のおのろけであり、瞠目の一句である。

あひにゆく足袋小走りに春の塵

この句の「足袋小走りに」に、これからの逢い引きに心浮かれている様子がありありと見えている。

別来来てさはやかに解く夏の帯

この句は、さはやかに解く夏の帯から、逢い引きが上首尾であり、気持ち晴ればれと高揚していることがわかる。

おわりに

母への思慕と自己完結

おはぐろの母すこやかに布子着て

莢豆のすちとる母の眼鏡小さし

夜潮氏が六才のとき、お母さんが亡くなられたそうである。したがって記憶をたどっても殆んど思い出せない。

そんなことを思うと、この両句は手許に残されていた写真を見ての作句ではなからうかと思う。

母よりの手紙ひからびた蚊を挟み

お母さんからもらった手紙をそれこそ大事に大事に保存しておられたのでしょうか。

久し振りに手紙を読むと、便せんの中にひからびた蚊がはさまっていたという光景である。涙なくして読まない切なく悲しくもある感動の絶唱である。

わが墓地の下見や虫のひげ振れる

自分の墓地の下見に行ったときのことである。

たまたまそこにいた虫がひげを振っていたというのである。その虫の名は何だったかはわからないが、ひげを振っているのは歓迎するという意思表示とみてとっておられる。

もちろん、そこに決められただろうと推察できる。

腰に団扇さして浄土を疑わず

腰にうちわを差しておまいりしておられる御仁は浄土をさらさら疑わず「なむあみだぶつ」の念佛三昧のお方でしょう。

それこそ夜潮氏ご本人の自画像であろう。

桐の花田のまんなかに無常堂

戦前までこのような光景は、一般的な風景であり、よく見かけたものである。

桐の花が匂ふ無常堂に明るい来世を夢見るのである。

そして、句集の最後は

元日や米寿のわれに傘寿の妻

という句である。

人間夜潮氏のありのままの表白である。

句集を通読して、みずみずしい詩心と柔軟さにあふれた会心の句集であることが確認された。

私にとって、多くの示唆を得た句集であった。